

<スミルノフ物理学>

これまでの記事では様々な相互作用が登場したが、<空海>ではシリウスー太陽ー地球の相互作用を改めて確認し、また、祈りがマグマのシリカを通じて地殻活動に作用したりすることを少々紹介した。そして、これらを説明可能とする鍵がスミルノフ物理学である、と。そこで、本編ではスミルノフ物理学の概要を紹介し、様々な事象との相関を考察する。

(1) スミルノフ物理学とは？

現在、膨大な費用を掛けて大型の加速器や観測機などから究極の粒子を見つけようと懸命で、それが宇宙の秘密を解き明かすとされる。最近では、物質に質量をもたらすと推測されるヒッグス粒子こそ究極で、“神の粒子”などとも囁かれている。(神は単なる粒子なのか???) その割には、宇宙は現理論では説明できない物質やエネルギーに満ちているともされ、それらはダークマター、ダークエネルギーと言われ、全宇宙のうちダークマターは26.8%、ダークエネルギーは68.3%を占めるとされる。(Wikipedia) つまり、現在の物理学は“神の粒子”が発見されたと言えど、宇宙の大部分は謎、という自己矛盾に陥っている。

これらのベースとなっているのは、最も正確とされている量子力学だが、高度に数学的な操作に終始しており、ごく一部の専門家以外、理解不能のものとなっている。また、高等生命体発生についても論証不能である。

このような現代物理学に対して異論を唱えているのが、スミルノフ物理学である。提唱者はロシアのアナトリー・パーブロビッチ・スミルノフ博士で、佐野千遥博士が継承している。

<https://ameblo.jp/allahakbar231/>

http://go-takahashi.sakura.ne.jp/sblo_files/em-platform/image/E382B9E3839FE383ABE3838EE38395E789A9E79086E5ADA6E6B4BEDrE4BD90E9878EE58D83E981A5E38080E789A9E79086E5ADA6.pdf#search=%27%E7%A3%81%E6%B0%97%E3%83%A2%E3%83%8E%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%AB+%E3%82%B9%E3%83%9F%E3%83%AB%E3%83%8E%E3%83%95%27

スミルノフ物理学はニュートン力学を基本とする。ただし、従来のニュートン力学とは異なる。従来のニュートン力学は静止系での理論体系で、その欠点を補うために、運動量保存則を導入している。

対して、スミルノフ物理学では、動的ニュートン力学と万有引力の法則をベースとする。プリンキピアで見落とされていた理論で、ラテン語の古文書から発見したという。実際、物体は別方向に異なった速度で運動しており、エネルギーにも方向性があるが、従来理論ではエネルギーの方向性を無視している。

$$F_1 \times V_1 = -F_2 \times V_2 = constant$$

$$F = -G \frac{M \cdot m}{r^2}$$

F: 力、V: 速度、G: 万有引力定数、M、m: 質量、r: 距離。

スミルノフ物理学では、プランク定数やハイゼンベルクの不確定性原理が示しているように、現実世界は連続実数ではなく、離散値（連続していない値）の世界であるとする。そのため、連続実数値の数学である微積分や確率統計学は使用せず、微分は差分、積分は和分となる。

従って、上記方程式を連立差分方程式として解くと、 $t=1/r$ となり、**宇宙始原 $t=0$ の時、 $r=\infty$ となり、単一エーテルの光り輝く存在であった！**これはまた、宇宙全域で起きている出来事をエーテル時間軸上の一点に投影して、情報として記憶することも意味し、**アカシックレコード**とも言えるものである。

また、物質波、電磁波、重力波が3つの解として得られるが、物質波の解は、星がフラクタル分割して誕生することを示し、黄金比で半径が縮まるたびに、星が生み出された。すなわち、**宇宙は秩序を形成する、エントロピー減少の収縮系である**。故に、秩序の高度化＝生命体の進化が起きる。

重力波は発振地点から離れるほど、距離の二乗に比例して大きくなり、短時間で超高速のタキオンとなることも導かれ、軽く光速を超える。つまり、**重力波に乗ればテレポーテーション現象、タイムマシン現象を見ることができる**。

現在の正統派理論からすれば、いわゆるトンデモ理論かもしれない。しかし、前述のように、現在の理論は自己矛盾に陥っている。ならば、従来とは異なる見方によっていろいろな事象が説明可能ならば、それを探求し、議論を深めるのが本来の科学的姿勢だろう。

以下、この理論から導かれる主な事例を紹介する。なお、この理論の詳細は佐野博士のスカイプ講座を受講する必要があるが、筆者は受講していないし、物理の専門家でもない。そのため、背景の数式など、更に考察を深めたい方は、

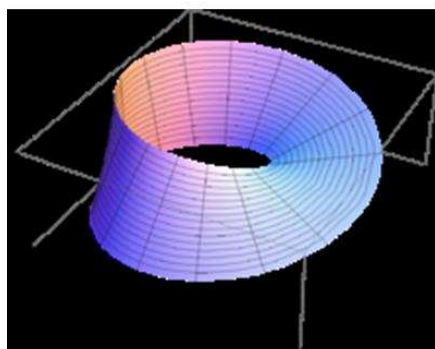
スカイプ講座を通じて佐野博士に直接問い合わせて頂きたい。ここでは一部、高校レベルの簡単な数式は提示するものの、数式を追う定量的な説明ではなく、定性的・概念的な説明を主とする。

(2) 宇宙の構造

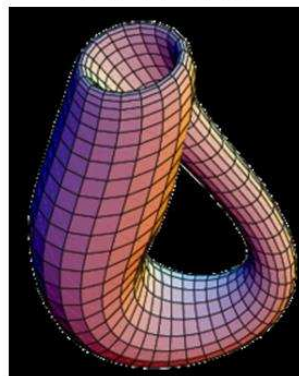
① 概要

宇宙は捻じれた空間で、エーテル繊維で満たされている。このエーテル繊維は、星と星とを引っ張ったり押しのけたりすることができる、**超弦・超繊維**である。宇宙空間をどこまでも一直線に進むと、いつの間にか、メビウスの帯を描いて帯の裏側に戻って来て、その後、再び元の位置に戻る**メビウス空間**である。2つのメビウスの帯を、その淵に沿って貼り合わせると立体的な疑似的クラインの壺ができるが、**宇宙の三次元的なイメージとしては、クラインの壺である**。以下の図はクラインの壺が三次元ユークリッド空間に浮かんでいるように描かれているが、「本来のクラインの壺」は四次元以上の空間にしか存在できない。無理して三次元空間の中に描いてあるので、細い管のところが壺の本体と交叉してしまっている。四次元空間の中のクラインの壺では、このような交叉が生じない。メビウスの帯に交差が無いのと同様である。

メビウスの帯



クラインの壺



Wikipedia



ここで、もう少し詳しく見てみよう。次のような二次元長方形を考える。

この長方形の青い矢印の向きが一致するように張り合わせると円筒ができるが、互い違いになるように張り合わせるとメビウスの帯になる。つまり、二次元の厚みの無い世界が、厚みのある三次元世界に変化する。

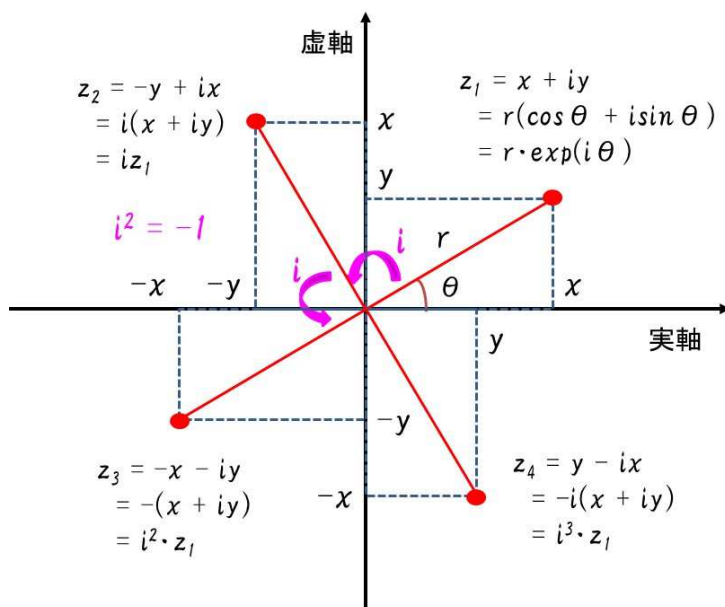
また、赤青各矢印をそれぞれ同じ向きに張り合わせると、一旦円筒を作り、それを曲げて両端を張り合わせれば良いから、ドーナツ形となる。

しかし、青の矢印を同じ向きに張り合わせ、赤の矢印は互い違いに張り合わせようとするならば、円筒を曲げる際、一方の端を自分自身に交差させて内側に入れ、もう一端に貼り合わせれば良い。このようにしてできるのがクラインの壺だが、実は形状に無理がある。メビウスの帯は二次元から三次元への変化なので、それと同様に、クラインの壺では三次元から四次元への変化となり、三次元の存在である我々には、四次元は認識できないためである。

(<http://v.rentalserver.jp/morigon.jp/Repository/SUBIO/sya.html> 参照。)

メビウスの帯を一周してくると、右手系／左手系が鏡面的に逆（鏡面変換）になり、正の質量＝反物質＝陽電子と負の質量＝物質＝電子が背中合わせに対を形成している。分かりやすく言うと、メビウス帯上の1点に上向きの矢↑を立てる。面に沿って1周してくると裏側となり、矢は反転して↓となる。これが、“鏡面的に逆”の意味である。（更に1周すると元の位置に戻り、↑となる。）

数学的には、メビウスの帯は複素平面と等価であり、メビウス帯面での1周は裏側、すなわち、複素平面上の180度変換に相当する。1枚の平坦な二次元の帯を180度捻ったものがメビウスの帯なので、当然と言えば当然であり、これは数学的には“ $i^2 = -1$ ”として表される。



ここで、複素平面での操作を極座標で見ると興味深い。

$$\cos \theta + i \sin \theta = e^{i\theta} \quad : \text{オイラーの公式}$$

$$z_1 = x + iy = r(\cos \theta + i \sin \theta) = re^{i\theta}$$

$$z_2 = -y + ix = i(x + iy) = iz_1 = ire^{i\theta}$$

$$z_3 = -x - iy = -(x + iy) = i^2 \cdot z_1 = i^2 re^{i\theta}$$

$$z_4 = y - ix = -i(x + iy) = i^3 \cdot z_1 = i^3 re^{i\theta}$$

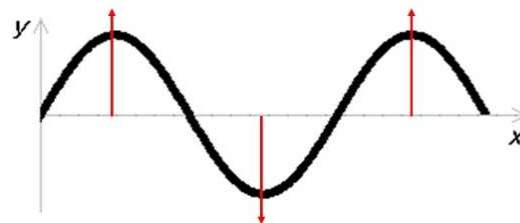
“虚数 i ” を乗じるだけで、容易に座標が変換されている。これはまた、微分する操作と同義である。（指数関数 $e^{i\theta}$ は連続関数なので、微分を適用する。）

$$\frac{d}{d\theta} z_1 = \frac{d}{d\theta} (re^{i\theta}) = ire^{i\theta} = z_2$$

$$\frac{d}{d\theta} z_2 = \frac{d}{d\theta} (ire^{i\theta}) = i^2 re^{i\theta} = z_3$$

$$\frac{d}{d\theta} z_3 = \frac{d}{d\theta} (i^2 re^{i\theta}) = i^3 re^{i\theta} = z_4$$

つまり、メビウス帯の鏡面変換は、複素平面上では“虚数 i ” を乗じる、あるいは微分することにより容易に行うことができる。そして、メビウス帯上の矢の向きは $\uparrow \downarrow \uparrow \downarrow \dots$ となるが、これは波動としての性質ということである。

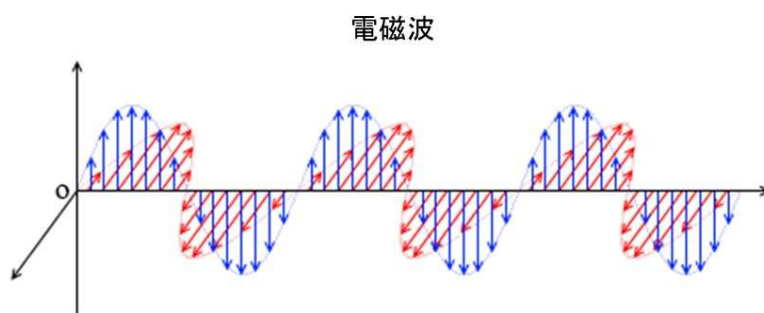


<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=sin%3D%3F%3Fmode%3Ddetail%3D5%26st%3D0>

また、複素平面に於いて、1回 i を乗じる操作は、角度にして 90 度の変換（回転）になっている。（各座標と図形的性質から明らか。）つまり、角度が 90 度ずれ、4 回繰り返すと元に戻る。また、波動に於いて角度（位相）が 90 度ずれるのは、 $\sin \theta \Leftrightarrow \cos \theta$ の関係であり、電磁波では電場と磁場の関係でもある。

スミルノフ物理学に於ける電気と磁気の関係は、従来の電磁気学で言われているように電気が能動で磁気が受動なのではなく、その逆で、磁気が能動で電気が受動である。電磁波は電場と磁場が交互に相手を起動するのではなく、最初に単極磁石の電子が回転しながらの直線運動が磁場の変動を引き起こし、磁場の変動のみが電磁波を維持しているのであり、磁場は回転しながら進み、その場その場に於いて、磁場の変動が電場の変動を引き起こしている。

そもそも、電流が流れると磁場がその導線の周りに発生するのは、電流が磁場を引き起こしているのではない。単極磁石である電子が導線の方に流れる結果、表面電荷に偏極が起こって電荷表面が破れ、電子の単極磁石としての本質が発現し、その回転する単極磁石が導線の周りに導線に沿ってネジの軌跡を描き、回転する磁場が発生するのである。(単極磁石：スピンする螺旋渦巻。)



<http://wakariyasui.sakura.ne.jp/p/elec/dennjiha/dennjiha.html>

複素平面や虚数は数学上の概念に過ぎず、現実には存在しないと言われるが、このようにメビウスの帯は複素平面そのものであり、波動の性質も複素平面上では議論が容易となる。複素平面のメビウスの帯が現実存在し、波動の性質が複素平面で容易に議論できることは、**我々の現実世界が複素空間である**からに他ならない！

複素平面（空間）では、複素平面（空間）の実軸への投影が実数である。例えば、“ $z_1 = x + iy$ ”の実軸への投影は“ x ”だが、“ $x - iy$ ”の実軸への投影も“ x ”である。（これは簡単な投影の例だが、もっと複雑な行列式による投影（写像）も可能である。）つまり、我々が現実世界と思っている空間は、大きな宇宙（四次元）の本質を三次元世界に投影した、ごく一部の世界に過ぎないのである。三次元世界の“ x ”という現実に対する本質は、“ $x + iy$ ”も“ $x - iy$ ”もあり得るのである。

つまり、**二乗してプラスとなる我々が“現実”だと思っている世界こそ“虚”であり、数学上の概念に過ぎないと思われていた二乗してマイナスとなる“虚”の世界こそ“本来の世界”である。二乗してマイナスの意味は、宇宙はメビウ**

スの帯構造の複素空間で、虚数 i を 2 回乗じることにより、鏡像反転の負の世界を表現できるということである。(虚数：imaginary number)

さて、三次元世界の物質的には負の透磁率、負の誘電率であることが負の質量の定義であり、物質的には比透磁率(比誘電率)が 1 より小さい場合を負の透磁率(誘電率)と定義し、磁化の場合は、負の磁化率でもある。

負の透磁率、負の誘電率の空間では、入り込むエネルギーよりも、出ていくエネルギーの方が大きい。(=フリーエネルギー！) 真空中では正負質量が相殺され、質量ゼロとして隠れている。負の透磁率・負の誘電率の世界の例としては、コイルの内側の円筒空間などである。負の世界では、空間距離と時間は逆転する。

メビウス帯の面に沿ってコイルを巻いて電流を流すと、面の表と裏で負の質量と正の質量が出現し、その磁力線はそれぞれ S 極単極磁石、N 極単極磁石となるが、S 極磁気単極子及び N 極磁気単極子こそ、あらゆる物質を構成する素粒子である。

単極磁石の存在は、Maxwell の 2 つの方程式を 1 つにまとめると導かれる。(スミルノフ物理学では、Maxwell 方程式にも誤りがあるとする。) 組み合わせた方程式は電場を含まず磁場のみで、一点から球面状に磁力線が放射することを示す。(回転する単極磁石が導線の周りに導線に沿ってネジの軌跡を描き、回転する磁場が発生するので、正確には円環ではなく、rot という表現自体も正確ではない。rot は、x-y 平面のある点で z 軸方向に右ネジを置いた際、どれくらいネジを回そうとするかを表す量、というイメージ。)

$$\text{電流の発生とその周りの磁場：} \operatorname{rot} H = \epsilon \frac{dE}{dt}$$

$$\text{磁場の変動による電場の発生：} \operatorname{rot} E = -\mu \frac{dH}{dt}$$

H: 磁場強度、E: 電場強度、 μ : 透磁率、 ϵ : 誘電率、t: 時間

$$\text{これより、} \operatorname{rot} \operatorname{rot} H = -\epsilon \mu \frac{d^2 H}{dt^2}$$

磁石の内部空間は負の透磁率であり、N 極と S 極の間に斥力が働く。S 極磁気単極子とは、負のエネルギーの左巻き S 極系エーテル繊維が 1 ヶ所にとぐるを

巻いて固まった、負の質量、左手系の光学活性を持った物で、磁気系である。N極系は右手系で、エントロピー増大要因の電気系である。

電場は短距離にしか及ばないが、磁場は長距離に及ぶため、宇宙空間を貫く。電磁波とは、負の世界と正の世界の境界に位置するエーテル現象であり、無限距離を瞬時に到達できるが、それはメビウスの帯・単極磁石を介して負の世界のテレポーテーションが発生することに依る。

宇宙中のS極磁気単極子は、S極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっているが、N極磁気単極子はバラバラである。つまり、非対称性がS極系とN極系の間に存在する。電子、陽電子、陽子、中性子、ニュートリノはこれらの相互作用の産物である。これらフェルミ粒子はS極磁気単極子とN極磁気単極子の数の差が奇数であり、同じ数どうしペアになっているのが光子などのボーズ粒子である。

・電子：

S極磁気単極子の周りにN極系エーテル繊維（電荷）が巻き付いたもの。

・陽電子：

N極磁気単極子の周りにN極系エーテル繊維（電荷）が巻き付いたもの。

・陽子：N-S-Nの磁気単極子。

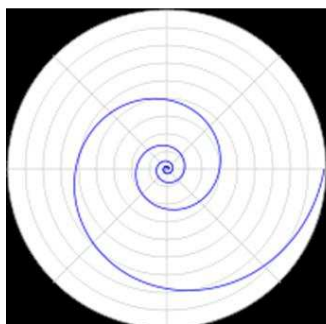
・中性子：S-N-Sの磁気単極子。

・ニュートリノ：

S極磁気単極子が希薄化されたエーテルで、重力波の量子。

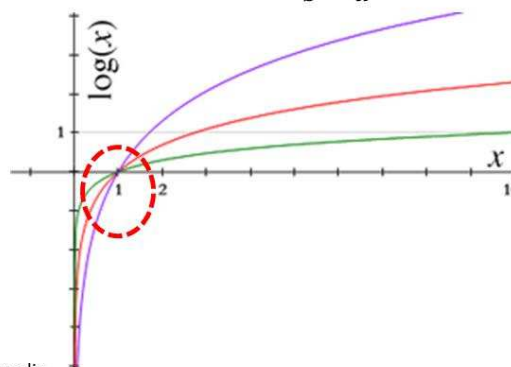
また、S極磁気単極子はすべて繋がっているので、お互い引き合い、万有引力の基となっている。そして、すべての星の中核にはS極磁気単極子が存在し、宇宙を貫くS極系エーテル繊維に繋がって、対数螺旋構造の星雲を形成している。対数螺旋は自己相似だから、任意の倍率で拡大・縮小したものは、適当な回転により、元の螺旋と一致する。これは、メビウスの帯の複素平面的性質（虚数 i を乗じていくことにより元に戻る）と同義だが、そうなる理由は、正負の世界の境界にメビウスの帯が稼働しているためである。そして、対数螺旋構造故に、負の透磁率、負の誘電率の概念は、比透磁率、比誘電率が1より小さい場合、となる。

対数螺旋 $r = ae^{b\theta}$



Wikipedia

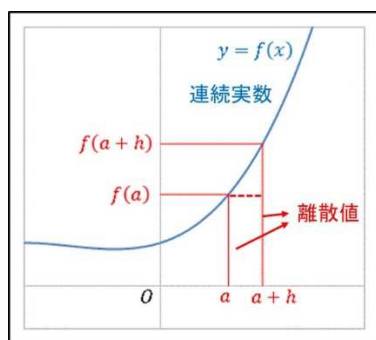
対数グラフ $\theta = \frac{1}{b} \ln \frac{r}{a}$



ここで、対数螺旋の自然指数関数は、前述のように何度微分しても係数が出てくるだけで、関数としての形は変化せず、元の自然指数関数のままである。自然指数関数は連続実数値なので微分が適用できるが、離散値の世界で微分に相当するのは差分である。離散値の世界に於いて、何度差分しても変わらない数列は、フィボナッチ数列である。

- ・フィボナッチ数列：1、1、2、3、5、8、13、21、…。
- ・差分：2-1=1、3-2=1、5-3=2、8-5=3、13-8=5、21-13=8、…。

つまり、何度微分しても変わらない連続実数値の世界の自然指数関数には、何度差分しても変わらない離散値の世界のフィボナッチ数列が対応する。



<https://excelmath.atelierkobato.com/differential/>

$$\text{微分: } \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$$

$$\text{差分: } \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$$

宇宙中のS極磁気単極子は、S極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっており、すべての星の中核にはS極磁気単極子が存在し、宇宙を貫くS極系エーテル繊維に繋がりを、対数螺旋構造の星雲を形成しているので、それがフラ

クタル分割で反映される我々の離散値の世界に於いては、星や電子の軌道比など様々な面で、隣り合う二項の比（1/1、1/2、3/2、5/3、8/5、13/8…）が黄金比に収束するフィボナッチ数列が登場するのである。

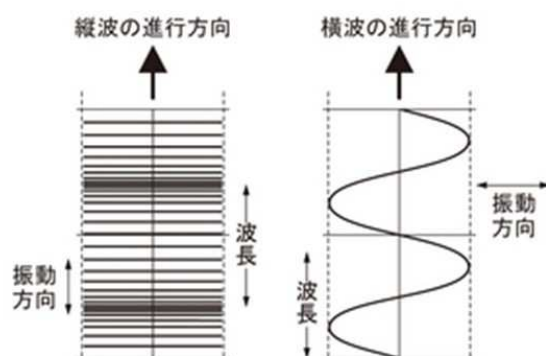
$$\text{フィボナッチ数列: } F_n = \frac{1}{\sqrt{5}} \left\{ \left(\frac{1+\sqrt{5}}{2} \right)^n - \left(\frac{1-\sqrt{5}}{2} \right)^n \right\}$$

$$\text{黄金比: } \Phi = \frac{1+\sqrt{5}}{2}$$

宇宙には固相、液相、気相、プラズマ相、エーテル相の5つの相が存在する。プラズマとは、実は各磁気単極子に分離した混合状態である。いわゆる**ダークマターはS極磁気単極子の雲である**。この雲が存在しているのは、宇宙が自転しているためである。（自転により双極磁場が発生し、極度に微弱の、局所的に負の透磁率・誘電率の空間となる。）

ダークマターのS極系エーテル繊維ですべて繋がった左巻きS極磁気単極子どうしが互いに接触面で自転速度を遅めあう結果、重力で引きあってまとまったのがブラックホールである。ブラックホールの傍にはN極磁気単極子の集まりであるホワイトホールが必ずあり、ブラックホールと対になって、双極磁場トラスを形成している。

反対方向の2つの磁場が打ち消し合っているゼロ磁場から、縦波磁気波と重力波が発生する。重力波は、宇宙創造のエネルギー（＝起源意識）が生み出した、負の世界から正の世界に発せられた波動である。縦波磁気波（地震の縦波P波なども）は重力波へと変化し、この波は飛距離の二乗に比例した速度へと無限加速されていく。（＝**超光速へ!**）



http://www.ncsm.city.nagoya.jp/cgi-bin/visit/exhibition_guide/exhibit.cgi?id=S402

磁場と電場は位相が90度異なるが、縦波磁気波から垂直方向へ発せられる縦波電気波は、磁気波が速度を増すにつれ、後方へとたなびくようになり、これが宇宙背景放射となる。**現宇宙は、宇宙史に於いて初期の段階に相当する。**

以上がスミルノフ物理学で導き出される宇宙論概要である。“常識”からすればトンデモ理論だろうが、そのベースはニュートンの古典力学であることに、注目しなければならない。簡単にまとめると、次のようになる。

- ・物質宇宙を生み出した大元の存在は、無限的な広がりを持つ巨大な光のエネルギーであり、そこから黄金分割により星や物質が誕生した。

- ・宇宙は秩序を形成する、エントロピー減少の収縮系である。

- ・宇宙はメビウスの帯のようにねじれた複素空間で、エーテル繊維（エネルギー）で満たされている。

- ・エーテル繊維は負の性質を有する S 極磁気系と、正の性質を有する N 極電気系で構成され、それぞれ S 極磁気単極子、N 極磁気単極子を形成する。

- ・S 極磁気単極子、N 極磁気単極子が物質の根源である。

- ・全宇宙は S 極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっており、万有引力の基となっている。そして、すべての星の中核には S 極磁気単極子が存在し、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維に繋がっている。

つまり、宇宙は無限とも言える創造のエネルギー＝起源意識が元で、物質宇宙はそこと S 極系エーテル繊維で繋がっており、対数螺旋を成す S 極系エーテル繊維がベースとなって物質が生成し、生命体が発生したということである。

生命体の発生と進化は秩序化なので、エントロピー増大に反するが、実は宇宙はエントロピー減少の収縮系なので、これが可能となっている。

換言すれば、螺旋的に上昇・進化することが宇宙の摂理であり、これに反する存在は淘汰される、ということである。つまり、**自分勝手なエゴを持った人間は、一時的に繁栄しようとも、宇宙の物理法則に従って、必ず破壊される運命にある。**

②眞名井の宇宙観との相関

眞名井の宇宙観では、物質世界は主体の創造エネルギーである起源意識が客体的な物質エネルギーに転換した状態で、起源意識の中に浮かび、主体を直接認識できないが、そのエネルギーが噴出してくる井戸のような状態である。そして、物質世界では“名”に依って、各々が識別されている。すなわち、構造

として、スミルノフ物理学から導かれる宇宙論と極めて類似している。

ならば、S 極系エーテル繊維は母なる起源意識と物質や生命体を結ぶ臍の緒のような存在であり、S 極系エーテル繊維を辿れば起源意識に繋がれるということである。神道に於いて、あらゆるものに神聖を見出す背景には、実はこのような理由があったのである。

そして、スピリチュアルで言うところの“繋がる”とか“アクセスする”ことは、生命体に内在する S 極磁気単極子（**クンダリーニ**、生命エネルギー、**ソマチッド**）から S 極系エーテル繊維を通じてのアクセスと解釈できる。いわば、S 極系エーテル繊維を通じての共鳴であり、これがしばしば“波動の共鳴”とも言われる。

この対数螺旋構造を有する S 極系エーテル繊維の流れ（エネルギー）を、その姿から東洋では太古から“龍”と呼んできたのであり、“龍”は現実世界の“蛇”となって、「生命の樹」に 3 回転半で絡みつく。だから、根源神は龍の姿とされることが多く、その姿は**注連縄**としても象徴されている。

そして、眞名井神社を祀る籠神社は竹冠に“龍”と書く。“竹”は篆書（てんしよ）体は以下のように書くが、これは 3 本柱の「生命の樹」と「知恵の樹」の「合わせ鏡」となっている象形で、「完全さ＝宇宙そのもの」の暗示であると同時に、宇宙が「合わせ鏡」のメビウス構造であることの暗示でもあり、上（＝起源意識）からエネルギーが降下（分化）することを暗示している。そこに、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維＝龍の存在を示したのが“籠”である。つまり、**“籠”は宇宙の姿を具現化している**のである。



<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E9%9B%B2%E9%BE%8D%E5%9B%B3>

竹の篆書体



<http://jigen.net/kanji/31481>

籠神社



眞名井神社



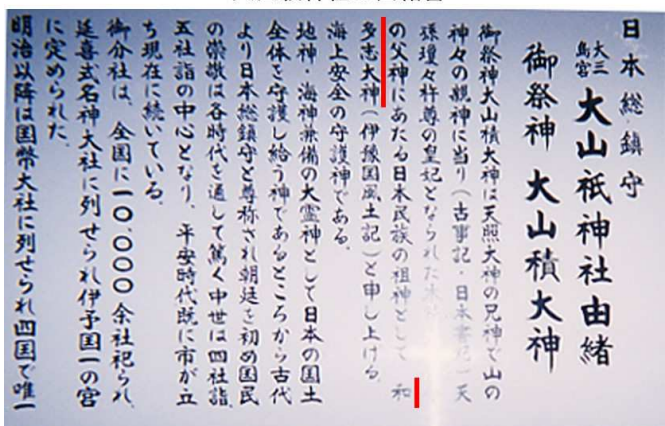
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B1%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

眞名井神社を祀る籠神社は“コ（の）じんじゃ”と読む。生命体は宇宙根源の“氣（キ）”を食物から取り入れるが、神に捧げる食物を“ミケ”と言って“御食あるいは御饌”と書き、“御”は丁寧語だから“氣”が転じて“ケ＝食、饌”となる。そして、これら力行の言葉ですべてが丸く収まる“オ”の形の発音に転化すれば“コ”となる。

すなわち、“コ（の）じんじゃ”とは“宇宙根源の氣を取り入れて丸く収まる神の社”という意味であり、宇宙の真理を表す“眞名井”と実に良く呼応していることが分かる。ちなみに、シュメール語で地球は“キ”だから、地球も宇宙根源の“氣”と繋がっていることを暗示する。

③古事記との相関

大山祇神社の由緒書



創造のエネルギー＝起源意識は巨大なエネルギーであり、そこから黄金分割によって星や原子が生成し、生命が発生した。神とはこのエネルギーであり、このエネルギーの分化こそが、次々に神々が誕生したことの真意である。だから、あらゆるものには神が宿っており、神の分化＝部分であって、かつ、

神を構成する全体でもある。これは、物質宇宙、とりわけ生命体は起源意識の一部であり、かつ、起源意識の全体を構成するという、眞名井の真理、和多志の真理と同じである。

そこで、古事記に於ける神々の登場を見てみると、実は驚くべきことが記載

されていたのである。（竹田恒泰、学研、『現代語 古事記』（2011）。）

・この天地の中心に、最初に天御中主神が現れ、次に万物を生み出す力である高御産巢日神（タカミムスビノカミ）と神産巢日神（カミムスビノカミ）が現れた。この三柱の神は、みな独り神として身を隠した。

この頃の大地はまだ若く、水に浮く油のように漂っていたが、泥海の中からすくすくと生え出る葦の芽のように宇麻志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコジノカミ）が現れ、天を永遠に支える柱として天之常立神（アメノトコタチノカミ）が現れた。この二柱の神もまた独り神として身を隠した。

以上の五柱の神は、天と地の仕組みそのものであって、男でも女でもなく、実体もなく、人々の前に姿を見せることはなかった。よって、この五柱の神を別天津神（コトアマツカミ）と言う。

天御中主神はエネルギー主体としての起源意識であり、同時に、そこから最初に分化した物質宇宙（客体）でもある。客体は主体からエネルギー供給されて存在し得る。主体は客体から情報をフィードバックされて進化し得る。従って、両者表裏一体の同一である。

高御産巢日神と神産巢日神は、万物を生み出す力であり、高御産巢日神の方が天照大神を支えたりするなど重要視されることからすれば、高御産巢日神はS極系エーテル繊維、神産巢日神はN極系エーテル繊維である。

その後、エーテル繊維が1ヶ所にとぐろを巻いて質量粒子となったのがS極及びN極磁気単極子であり、ここから物質が生成したが、S極磁気単極子がS極系エーテル繊維によって全宇宙を貫いているので、天を永遠に支える柱と言え、天之常立神であり、宇麻志阿斯訶備比古遲神はN極磁気単極子である。これらはあたかも実態が無いかの如く、ダークマター、ダークエネルギーとして存在している。“従来理論”では、宇宙の大部分を占めるこれらについて謎とされているから“ダーク”と言われている。（つまり、“最新科学”は宇宙の大部分を説明できない。）そして、物質や生命の根源となっているから、別天津神なのである。なお、ここで言う天と地の仕組みとは、宇宙の仕組みである。この後、古事記では以下のように続く。

・こうして天と地が生まれると、次に国之常立神が、続いて豊雲野神（トヨクモノノカミ）が現れた。この二柱の神もまた独り神として身を隠した。

以後、男女ペアの神々が次々に5世代現れ、国之常立神から国生みのイザナギとイザナミまでを、神世七代（かみよななよ）と言う。

消えてしまった反物質は、独り神として身を隠した、とも言えるが、国之常立神は天御中主神とも同一視され、生成した宇宙にはエネルギーの塊である“太陽＝恒星”があり、そこから星が分化したことからすれば、国之常立神は“太陽”であり、豊雲野神は星である。

ペアというのは陰陽やS極・N極のペアであり、物質生成のことを言っており、そこから生命の発生、人類の誕生を暗示する。

なお、神世七代は創世記に於ける 7 日間の天地創造と、エンキが地球での労働を 7 日間周期としたことを暗示する。（＜神々の真相 1＞）

ここで、隣同士の数の比が次第に黄金比に近づいていくフィボナッチ数列を見ると、非常に興味深い事実気づかされる。

・ 1、1、2、3

最初の 1 は宇宙を生み出した起源意識。次の 1 は物質宇宙で、起源意識と表裏一体。そして 2、3 はそれぞれ高御産巢日神、神産巢日神。また、数字 3 はこれら三柱の神でもある。

・ 5、8、13、21、34、55、89

国之常立神（＝5）、豊雲野神（＝8）、男女ペア神（＝13～89）5 セット。5 と 8 は 1 桁だから独り神、以降 89 までは 2 桁だから男女ペアの二人神という意味である。

更に、イザナギとイザナミは 89 に相当するが、8 と 9 で最高神ヤーとククリ＝菊理姫。次は 144 だが、3 桁だから、主要な子の三神、スサノオ、ツキヨミ、アマテラス。また、イザナギとイザナミの国生み後の話なので、そこから地上の人類が誕生、と見なすと、 $144 = 12 \text{ 支族} \times 12 \text{ 人の使徒の国} = \text{日本}$ 。国は多くの人の集まりだから、千、万などで表現される。ならば、14 万 4000 人（＝日本）、とも言える。では何故、これが地上の人類誕生と言えるのか？

両神の子、スサノオは高天原から追放され、出雲に降臨した。（日本書紀では新羅のソシモリに。）つまり、アマテラスの孫のニニギが天孫降臨する以前に、既に地上に降臨していた。そして、ニギハヤヒはニニギよりも以前に降臨しており、一説には、ニギハヤヒは地上に降臨した最初の大王、とも言われている。ならば、カバラ的にスサノオはニギハヤヒと同一であり、ここから人類が誕生していったと見なせる。ちなみに、続く数列は以下である。

・ 233 : オシホミミ。

・ 377 : ニニギ。

- ・ 610：ホホデミ。
- ・ 987：ウガヤフキアエズ。
- ・ 1597：神武。 $(1+5+9+7=22)$ 、安定化、宇宙意識。）

以上、古事記の初期の神々は、宇宙誕生の仕組み（黄金比収縮）を暗示していたのである！

④サーンキヤ哲学との相関

インドのサーンキヤ哲学では、世界の創造は物質原理プラクリティの動揺（振動）から始まるとされる。プラクリティが振動して均衡を崩すと、その波紋は宇宙へ浸透し、能動的な現象世界が始まる。

起源意識が生み出した、負の世界から正の世界に発せられた波動が重力波であり、重力波は縦波磁気波が変化したもので、磁気波は S 極系エーテル波である。左巻き S 極系エーテル繊維は 1 ヶ所にとぐろを巻いて固まり、負の質量、左手系の光学活性を持った S 極磁気単極子となり、物質形成の基となっている。これこそまさに、プラクリティ振動による現象世界の開始を表していると言える。

プラクリティは下向きの三角形で象徴されるが、起源意識からの黄金分割によるエネルギー分化（上から下へ）の暗示である。これは、前述の“竹”と同じである。

⑤宇宙ホログラム説との相関

最近では、宇宙はホログラムに過ぎないという説も現れている。すべての星の中枢には S 極磁気単極子が存在し、宇宙空間を貫く S 極系エーテル繊維に繋がっており、宇宙空間をどこまでも一直線に進むと、いつの間にかメビウスの帯を描いて帯の裏側に戻って来て、その後、再び元の位置に戻るメビウス空間であるならば、磁氣的に宇宙を見通した場合、宇宙はある場所からの投影に過ぎない、という見方も可能となる。

そして、宇宙は複素空間であり、我々の三次元世界はその投影に過ぎないから、ホログラム的であると言える。

⑥合わせ鏡との相関

メビウス構造の宇宙に於ける鏡面変換の性質は、カバラに於ける奥義「合わせ鏡」である。これにて、宗教・オカルトと科学の融合！

どうやら、スミルノフ物理学は“トンデモ”などではなく、これこそが本論

である可能性がある。勿論、様々な批判が渦巻いていることを承知の上で。以降、スミルノフ物理学から導かれる重要事項について紹介する。聞き慣れない原理の上に成り立つ話とはつつきにくい、様々な現象を理解するために、“こういうものだ” という程度での認識ができれば十分であろう。

(3)原子核、磁石、反重力

①原子核

S 極磁気単極子の周りに N 極系エーテル繊維(電荷)が巻きついたものが電子、N 極磁気単極子の周りに N 極系エーテル繊維が巻きついたものが陽電子であり、電子、陽電子はそれぞれ S 極単極磁石、N 極単極磁石である。

単極磁石の自転により単極誘導が起こる結果、それぞれ表面にマイナスとプラスの電荷を帯びる。この時、磁気エネルギーは電気エネルギーに変換される。つまり、ここでも磁気が能動で、電気が受動である。

中性子は S-N-S の磁気単極子から、陽子は N-S-N の磁気単極子から構成されるため、中性子は負の質量・負のエーテルエネルギー系であり、陽子は正の質量・正のエーテルエネルギー系である。

核内の S 極磁気単極子は、その質量を生成する S 極系エーテル繊維で一筆書きにすべて繋がって網の目を形成し、S 極左巻き渦どうしがその接触面で互いに相手の自転速度を打ち消しあう結果、その打ち消し分を補うように、S 極磁気単極子は S 極系エーテル繊維を更に吸い込む。それにより核内の全 S 極磁気単極子間に強力な引力(重力)が発生し、原子核はバラバラになることなく、1 つにまとまっている。この際、S 極の性質を 2 つも有する中性子の寄与は大きい。

電荷的には反発しあう陽子を複数含む原子核がまとまっているもう 1 つの理由は、正の性質の陽子から負の性質の中性子にエーテルエネルギーが供給されていることで、エーテルエネルギーの流れは $N \rightarrow S$ である。この結合エネルギーのため、バラバラの時の質量総和よりも原子核の総質量は小さくなり、これが質量欠損である。

陽子は N-S-N、中性子は S-N-S であり、エーテルエネルギーの流れは $N \rightarrow S$ であるから、陽子では N-S で中和して N が残る。N は陽電子的性質の + の電荷だから、陽子は + の電荷となる。対して、中性子は S が残るが、S は磁氣的性質で電荷を持たないので、中性子は中性となる。

また、原子核は原子番号が大きくなるほど、陽子数より中性子数の方が多くなる。この理由として、正の性質の陽子 N-S-N から負の性質の中性子 S-N-S にエーテルエネルギーが供給されているが、正の性質である N 極系エネルギーのバランスを取るため、N 極系性質が少ない中性子の総数が陽子総数より多くなる。

これにより、負の誘電率となって原子核の温度は低下し、極低温の状態にある。つまり、原子核の中で陽子と結合する中性子は、原子核の温度を低下させる役割を担っている。また、原子核内は S 極系エーテル繊維が網の目を形成して S 極的な性質が優勢となっているので、原子核が宇宙の果てまで届く重力場を作り出していることになる。

なお、原子核内は負の誘電率だが、透磁率は正である。(S-N-S) - (N-S-N) - (S-N-S) - (N-S-N) …のように交互に連鎖した閉じた構造が、その連鎖の軸の周りに自転する結果、単極誘導の原理により、その連鎖全体に電流が一方向に流れ続け、負の誘電率となる。

原子核を構成する陽子と中性子は、正の世界にある真空エーテル自体が有するメビウス帯構造から発生するので、原子核内は正の世界の真空エーテルの場となっているが、その正の世界の真空エーテルは正の透磁率である。従って、原子核内は正の透磁率である。

負の透磁率（完全反磁性）とは、単極磁場の発生を意味し、単極磁力子の生成を連鎖する。たとえ極低温の状態でも、トポロジカル超伝導回路（*）の構造が発生しない限り、負の透磁率にはならない。

* トポロジカル超伝導回路

電気回路に抵抗があろうとも、電磁誘導の法則に基づき、室温で無限大に近い電流が流れる、超伝導の原型を成す回路。

反物質（陽電子）または N 極磁気単極子だけで構成された星が存在しないのは、電子と陽電子、S 極磁気と N 極磁気が互いに引き合い、合体して対消滅し、物質として残らないからである。（N 極磁気単極子の集まりであるホワイトホールは、強力な S 極磁気単極子の集まりであるブラックホールと対となる双極磁場トラスを形成するために存在できる。）

また、自発的対称性の破れ（物質に対する反物質の量が圧倒的に少ない事）は、N 極系で正の質量（正のエネルギーの塊）を持つ反物質（陽電子）が、真空空間の至る所に充満する正のエネルギーを有するエーテルの中にエネルギーを解放して、すぐに消滅してしまうからである。換言すれば、宇宙にバラバラに網目のように存在する N 極系エーテル内で生成・消滅を瞬時に繰り返している。

宇宙空間は極度に微弱の負の誘電率・透磁率の空間であるため、電子は単体で存在し得る。

②磁石

原子核内は負の誘電率の世界であるため、S 極磁気単極子どうし、N 極磁気単

極子どうしが引き合い、それぞれが一塊となっている。その結果、S 極系－N 極系では斥力が作用し、離れる方向にある。そのため、双極磁石（普通の磁石）を幾ら小さく切断しても、切片がすべて必ず N 極と S 極を持った双極磁石になり、S 極だけ、N 極だけの単極磁石としては取り出せない。

対して、磁石の外の世界は正の誘電率・正の透磁率の世界のため、双極磁石の N 極と S 極は引き合い、同極どうしは反発する。

③反重力

S 極磁気単極子は、負のエネルギーの左巻き S 極系エーテル繊維が 1 ヶ所にとぐろを巻いて固まった、負の質量の磁気単極子であるため、S 極磁気単極子の自転を加速すれば反重力が発生するが、N 極磁気単極子の自転を加速すると、温度が高温になるだけである。

反重力に関しては、負の誘電率・透磁率の下でビーフェルト・ブラウン効果（N 極磁気単極子が S 極磁気単極子の自転を加速することによって発生する S 極間の反重力効果）を発揮させると、容易に反重力が発生する。

*ビーフェルト・ブラウン（Biefeld - Braun）効果の実験例

天秤の片方の皿の上にコンデンサー（2 つの近接した電極の間に絶縁体を挟んだもの）をその極板が上と下になるような向きに置き、他方の皿の上にはそのコンデンサーと重さが釣り合う錘を乗せて釣り合わせる。

ここで、コンデンサーの上の極板にマイナスの電荷、下の極板にプラスの電荷が帯電するようにさせると、コンデンサー側が重くなったかのように天秤はコンデンサー側が下がる。

逆に、コンデンサーの下極板にマイナスの電荷、上の極板にプラスの電荷が帯電するようにさせると、コンデンサー側が軽くなったかのように天秤はコンデンサー側が上がる。

つまり、マイナス電荷側からプラス電荷側に何らかの力が作用している。

(4)放射性元素の核変換（無害化）

原子核内では、正の性質の陽子から負の性質の中性子にエーテルエネルギーが供給されているので、原子核としてまとまっている。だから、この結合エネルギーは正の余剰エネルギーだが、ここに正のエーテルエネルギーを有する陽子が侵入しても、何の反応も起こらない。

対して、負のエーテルエネルギーである中性子が侵入すると、中性子は正の結合エネルギーを激しく吸収しようとし（＝N 極エーテル繊維が陽子に大量に巻きつき）、陽子・中性子の対が破壊され、分裂して陽子は対の中性子を手放し、

その中性子がまた反応する。

このような反応が連鎖して核分裂が繰り返され、極低温だった原子核内の温度は指数関数的に上昇する。これが、原発や核兵器に於ける核分裂反応の原理であり、原子核に中性子を衝突させると、熱核反応となる。そして、非放射性だった元素が放射性元素へと変わってしまう。

なお、核内は極低温なので時間がほとんど停止しており、元素の自然崩壊は起きない。しかし、放射性元素のように多量の中性子を有すると、中性子の S 極左巻き渦と陽子の N 極右巻き渦がその接触面で互いに相手の自転速度を強めあう結果、電荷の基である N 極系エーテル繊維を巻き付け、核内の温度が上がる。それに伴い、それまで自転していなかった中性子が自転し始めるが、中性子は S 極的性質なので反重力が発生し、核内が不安定となる。そのため、放射線を放出して安定化しようとする。

電子には負の質量を持った S 極磁気単極子があり、普段は自転による単極誘導で発生する電荷に囲まれている。しかし、光速近くまで加速されると、表面電荷が消え去って、磁気単極子としての性質が現れる。

あるいは、左ねじれのメビウス超伝導回路で負の質量の S 極単極磁石が、右ねじれのメビウス超伝導回路で正の質量の N 極単極磁石が生成する。

超伝導は、原子核外まで負の誘電率・透磁率の空間がはみ出し、外部の正の誘電率・透磁率の空間と重ね合わされてゼロの誘電率・透磁率となるため、電気抵抗がゼロとなる現象である。

S 極単極磁石の脇を光が通り抜けようとする、重力レンズ効果により、光が大きく屈折する。この集光のメビウスねじれ場による S 極単極磁力子生成・照射により、S 極単極磁力子が放射性物質の原子核に近づくと、中性子や陽子をその構成要素である S 極単極磁力子と N 極単極磁力子まで解体し、更に、左ねじれ S 極と右ねじれ N 極を和して消滅させる。

つまり、**ウランやプルトニウムなど放射性元素の原子核を安全に解体・消滅させることができる！**

対して、高速に加速した電子を荷電粒子として原子核に衝突させても、原子核は温度上昇し、有害なガンマ線を多量に放射するだけである。

また、メビウス超伝導回路で生成させた負の質量の S 極単極磁石空間は、時空の穴、ブラックホールでもあり、弾丸であろうが、ロケット弾であろうが、レーザー光であろうが、のみこんで消してしまう。そして、重力レンズ効果により、人や物体の完全かつ安全なステルス性を実現することができる。

更に、メビウス超伝導回路の真ん中の穴を中性子が通過すると、中性子の有する磁場が作用して巨大電流が生じ、強力なねじれ場を発生させるので、中性子は単極磁力子まで分解する。そのため、小さなメビウス超伝導回路を多量に作製し、それらをメッシュ状につなぎ合わせたシートで中性子発生源の放射性物質を包み込めば、縦波磁気波ガンマ線も含め、放射能は外部に漏洩せず、崩壊させることができる。

すなわち、**S 極単極磁石（磁力子）**は、**原発・核兵器を無害化・無効化**できると同時に、使用方法によっては核兵器のような甚大な被害を出すことなく、敵の電子制御された兵器すべてを無効化できる、最終かつ究極兵器と言える。



<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=%E5%8E%9F%E5%AD%A0%E7%82%89%E5%86%99%E7%9C%9F#mode%3Ddetail%26index%3D165%26st%3D6177>



https://search.yahoo.co.jp/image/search;_ylt=A2RCK_EIM2VapTIA_j2U3uV7?p=%E6%A0%B8%E5%85%B5%E5%99%A8%E5%86%99%E7%9C%9F&aq=-1&oq=&ei=UTF-8

(5) 太陽と地球



https://search.yahoo.co.jp/image/search;_ylt=A2RCK_EIM2VapTIA_j2U3uV7?p=%E5%A4%AA%E9%99%BD%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A&aq=-1&oq=&ei=UTF-8



太陽の内部には、自転軸の周りに負の誘電率・透磁率の円筒状空間が存在し、そこに S 極磁気単極子と N 極磁気単極子が常駐し、**中心付近の温度は高温ではない。**

太陽の北極から外部に出て来た負の質量の S 極単極磁力子が集まって温度が低い黒点を形成し、南極から外部に出て来た正の質量の N 極磁気単極子が温度の高い輝点を形成する。黒点・輝点から出た S 極及び N 極磁気単極子は正の世界で合体して、プラズマを発生して太陽風となる。

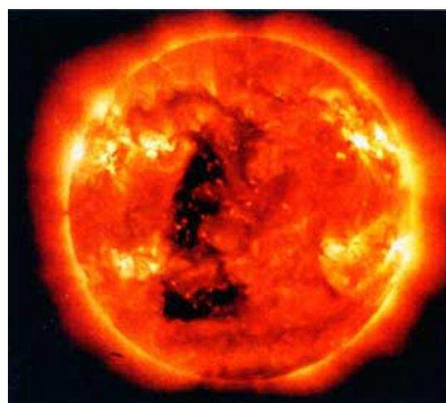
従来理論でも、太陽表面が数千度であるのに対し、はるかに離れた周辺コロナが数百万度なのは謎とされ、磁力線の再結合エネルギーではないか？とされているが、やはり、キーは磁気なのである。

太陽と言え、2012年3月11日に表面から星（暗黒球体）が出現したが、現在の太陽半径が、太陽の中心と金星を結ぶ距離の黄金比になっていたことから、既に2011年に、太陽からの星の出現は予測されていた。

2012年3月11日の暗黒球体出現



暗黒球体出現翌日の太陽表面



<http://amanakuni.net/uchu/73.html>

地球内部にも負の誘電率・透磁率の円筒状空間が存在する。地球の重心に向かって流れ込む重力エーテル繊維が、地球の自転に伴って北極＝S極では左巻きにねじれ、南極＝N極では右巻きにねじれている。

S極左巻きエーテル繊維が、地球重心にある負の質量をS極の中心に取り込み、負の質量のS極単極磁石を出現させる。（星の中核にはS極磁気単極子が存在し、宇宙を貫くS極系エーテル繊維に繋がっている。）その周囲には、一続きの左巻きエーテル繊維が、放射状に巻き付いている。また、N極右巻きエーテル繊維が、地球を構成している正の質量をN極の中心に取り込み、正の質量のN極単極磁石を出現させる。その周囲には、一続きの右巻きエーテル繊維が放射状に巻き付いている。これにより、S極N極別々の単極磁石として、地磁気が発生している。

つまり、北極はS極単極磁石であり、S極磁気単極子は宇宙全体を貫いて起源意識と繋がっているから、天に於ける不動の星である北極星は創造主たる天御中主神と見なされ、また、日本では死ぬと頭を北に向けられるのである。

北極から出ているS極磁気単極子は温度が低いため、北極には輝度の低いオーロラが発生する。南極から出ているN極磁気単極子は温度が高いため、南極

には白く明るいオーロラが発生する。

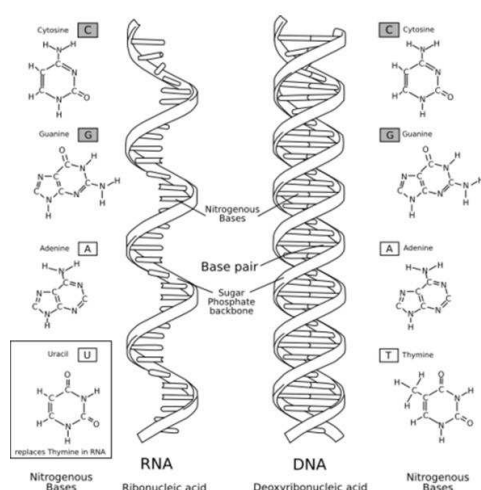
地球内部の負の誘電率・負の透磁率の円筒形空間は、中心から外に向かって光エネルギーを常に発しているため、常に“太陽”が輝いている様に見える。また、低温化する S 極系磁気単極子と、高温化する N 極磁気単極子が釣り合って温暖である。地球内部の負の世界では、S 極及び N 極磁気単極子間の斥力により、人は円筒の内面に足で立ち、頭は円筒の軸の方に向く。つまり、**地球内部**はいわゆるシャンバラであり、これこそが、**地球プラズマ亜空間の実態**である。

(6)DNA とヨーガ、北斗七星、祈り、死

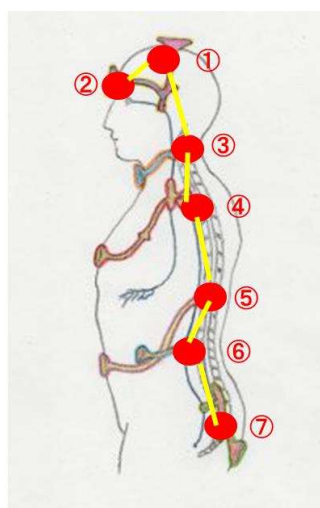
DNA の非常に近接した右巻き二重螺旋構造はトロイダル・コイル=テスラ・コイル構造（コイルの導線自体が更に細かいコイルになっている）で、内部は互いの電磁誘導によりゼロ磁場となって電気抵抗がほぼゼロ（=常温トポロジカル超伝導回路）となり、発熱することなく、巨大な電流が流れる。

その電流エネルギーは、エーテルエネルギーを取り込んで得たエネルギーであり、故に、生命体は自己の周囲に常温プラズマ=オーラを発する。むしろ、この構造があるため、宇宙空間に充満するエーテルエネルギーを取り込める。

電流は N 極系であるから、負の質量、負のエネルギーである S 極系エーテルエネルギー（磁気単極子）を強力に集めることとなる。それにより、負のエネルギーが生命体体内の隅々まで送り出されるが、負のエネルギーは反エントロピーの源泉故に、生命体は必然的に進化する。



Wikipedia



http://haroisystem.com/sakana/topics.php?TOPICS_ID=zazensaho_11

すなわち DNA は、宇宙全体を貫いて起源意識に繋がる S 極系エーテルエネルギー（磁気単極子）＝生命エネルギーを人体に取り入れ進化させる作用をしており、従って、人体は大宇宙に対する小宇宙と言える。人体が大宇宙に対する小宇宙であることは、チャクラの位置が北斗七星を形成することでも表されている。北斗七星は天帝＝北極星の御車であり、諏訪の北斗神社では天御中主神を祀るので、北斗七星は天御中主神＝起源意識のシンボルである。

チャクラと言えばヨーガだが、ヨーガに於いて、大宇宙の絶対的エネルギーであるプラナが人体に降りて7つのチャクラが活性化すると、3回転半のとぐろを巻く神蛇で象徴されるクンダリーニが覚醒し、大宇宙と一体化するために、脊椎を上昇して頭頂のサハスラーラに至るとされる。負のエネルギーの左巻き S 極系エーテル繊維が、1ヶ所にとぐろを巻いて固まった、負の質量を有するのが S 極磁気単極子であることからすれば、クンダリーニの活性化とは、体内に眠り、起源意識と繋がることのできる S 極磁気単極子＝生命エネルギーを S 極系エーテルエネルギーを取り入れて活性化する、ということに他ならない。

そして、これが祈りに繋がる。すなわち、人の意識の本質は S 極磁気単極子であり、宇宙全体を貫く S 極系エーテルエネルギーを通じて、祈りの波動が起源意識と共鳴する。先にも述べたように、宇宙はメビウスの帯構造であり、そこには波動的性質があるためである。

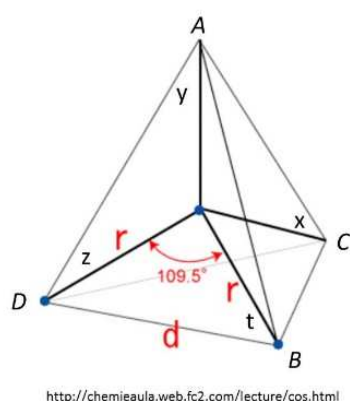
また、死に関して言うならば、死とは物質としての肉体から生命エネルギーの本質である S 極磁気単極子が抜け出し、起源意識のもとに戻る（一体化すること）に他ならない。（従って、脳死となっても、生命エネルギーが抜け出していなければ生きているということであり、蘇る可能性が残されている。）起源意識のもとに戻るにより、生前の経験や記憶が起源意識にフィードバックされ、起源意識が進化する。しかし、死ぬと天国と地獄に分けられるとか、墓に入っただろう、などと生前に教えこまれる＝洗脳されることにより、意識としてのエネルギー体が束縛されて（酷い場合は浮遊霊や地縛霊となり）、起源意識のもとに戻るができなくなってしまうのである。これを戻すための手段として、特定の宗教に於ける祈り＝供養が用いられる。この行為は、俗に「光の世界に送る」などとも言われている。

生命体とは、起源意識というエネルギー体では経験できない“感覚”というものを通じて感じ、様々なことを認識・経験し、自らが何なのかを知り、進化するために創られた創造物であり、すなわち、起源意識の分身であり、物質宇

宙はその生命体の活動の場（器）として創造されたのである。宇宙がエントロピー減少の進化系であるのは、これ故である。

(7) 宇宙の座標軸とテレポーテーション

スミルノフ物理学では、正四面体系座標軸 (x, y, z, t) を採用する。時間 t を含む各軸は、正四面体中心から各頂点への辺である。



一般四面体は位相幾何学的に正四面体と同相で、宇宙空間を隙間無しにすべて埋め尽くすことができる、一般メビウス構造と同じである。メビウスの帯は、中心線に沿って切り開くと、立体的に交差した 8 の字型になる。四面体の頂点を A、B、C、D とすれば、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow A$ と一筆書きできるが、この図で手前側から平面的に見ると、やはり 8 の字を描き、メビウスの帯とトポロジカル（位相）的に同相であることが分かる。すなわち、四面体構造は宇宙

のメビウス帯構造と同義である。

宇宙はメビウスの帯のような複素空間で、エーテル繊維で満たされているから、メビウス構造と同義の四面体構造は、エーテル繊維を媒介する。

物体が運動するとき、運動方向へ実時間軸が向く。その場合、 t 軸に垂直な x, y, z 平面に於ける空間移動では時間の変化を伴わないので、その場合の運動は瞬間移動＝テレポーテーションとなる。

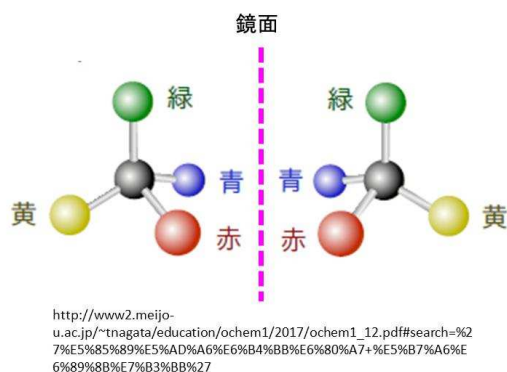
また、宇宙船の進行方向の後方に S 極磁気単極子を置くことにより、宇宙船を後ろから光速度で追い抜いて行く光の矢の速度が後ろに引き戻され、時間が遅く進み、過去に至る。逆に、進行方向前方に置けば、光の矢が加速され、時間が速く進み、未来に至る。

(8) 四面体構造と様々な特性

海藻（植物）内で、メビウスの帯と同義な正四面体結晶構造を有する酵素がエーテル繊維を媒介すると同時に、トポロジカル超伝導回路として作動している DNA と連動し、巨大電流と強力なねじれ磁場を作り出すため、磁気冷却が起きつつ S 極磁気単極子を強力に集め、**常温核融合が起き**、ヨウ素や炭素などが生成する。

生体内分子には、アミノ酸をはじめ、光学活性の物が多い。光学活性は、一般的に中心元素（不斉中心）に対して正四面体頂点に配置された原子群で議論

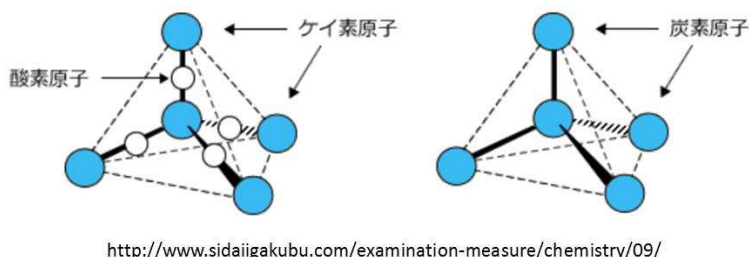
される。(軸不斉や面不斉の場合もある。)



正四面体中心に対して頂点に原子群を配する場合、2通りの配置が可能だが、これらは完全に重ねることができない。これが、光学活性体＝鏡像異性体であり（ここでも“鏡像”である）、左手系及び右手系となる。自然界に於いては、片方は有効な成分だが、もう一方は役に立たないか、逆に害を及ぼす場合が多い。化学合成する場合、制御しなければ半々にできてしまうが、それを制御して有効成分のみ合成する方法に対して、かつて、ノーベル化学賞が授与された。

この自然界に於ける光学活性の起源として、地上に最も多く存在する二酸化ケイ素＝シリカ (SiO_2) が有力候補として挙げられている。二酸化ケイ素も光学活性があり、これを鋳型として、生命が進化したのでないか？と。これは、アムンナキが人類創成実験をした際、ニビルの容器ではうまくいかなかったが、地球の粘土から作った容器でようやく成功した、ということからも裏付けられる。(＜神々の真相 1＞)

二酸化ケイ素の典型的な結晶は石英＝水晶で、その基本結晶構造はやはり正四面体であり、魔術の道具として使われる。そして、元素周期表でケイ素と同族の炭素は、やはり正四面体構造でダイヤモンドとなり、最も硬い硬度を誇り、屈折率が高くて全反射しやすい。(この全反射が輝きの要因。)



このような性質は、メビウスの帯と同義な正四面体結晶構造がエーテル繊維を媒介することに依るが、左手系メビウス帯の立体 8 の字に沿って大きな電流が流れ、正四面体の中心に強力な S 極磁気単極子が生じるので、左手系でこの現象は顕著である。それ故、地球上の生命体のタンパク質はほぼ全て左手系（L 体）のアミノ酸から構成されているのは、左手系シリカが鋳型となったため、と言える。そして、シリカの正四面体結晶構造は螺旋構造を形成するため、同じく対数螺旋構造のエーテル繊維と呼応しやすい。

正四面体構造の左手系シリカが地球上の生命体の鋳型であるならば、その高度生命体である人類はエーテル繊維を媒介する存在であり、DNA の S 極磁気単極子を強力に集める作用も相まって進化する存在と言える。そして、**折りの波動は S 極磁気単極子を通じて岩石やマグマの主成分であるシリカに作用し、シリカの四面体メビウス構造がエーテル繊維を媒介して、創造主＝起源意識と呼応する。**（シリカには温度・圧力によって様々な相状態があるが、超高压下のステイショバイトを除き、SiO₂ は基本的に（変形）四面体構造である。）

更に、＜空海＞に記されているように、生物の中にはシリカとしてガラス質の骨格や殻を形成するものがあり、イネ科の植物などはその例である。日本人が米を主食とし、神道に於いて米が最も神聖なものとされているのは、シリカを媒介として起源意識と呼応するためであり、“米の気”が“繋がるための氣＝エネルギー”となるわけである。（米がシリウスと金星を繋いでいるシンボルでもあることは、＜空海＞参照。）

また、神道に於いて米と同じぐらい重要とされるのは水である。固体の水（＝氷）も酸素原子が正四面体配置しているが、液体の水では比透磁率が 1 より小さい＝負の透磁率で、これは負の磁化率と同義である。（他に磁化率がわずかに負なのはビスマスなど。真空はゼロ、超伝導状態では -1。）従って、**適切な磁場（と周波数）の負荷により、水は負のエーテルエネルギーを強力に取り入れ、永久機関エネルギー源として作用するだろう。**酸素と爆発的に化合する危険な水素ガスの利用ではなく、液体の水の利用を考えるべき。（“水の素”ではなく、水そのものを。）

そして、水は負の磁化率だから、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維＝龍の良い媒介物であり、故に、龍神は水神とされるのであり、籠神社の龍（エネルギー）と眞名井の水（物質）は、両者表裏一体の関係にある。そして、御神酒とされる日本酒は、米（＝シリカ）と水、麴（＝酵母）の三位一体の賜物と言える。

(9) ピエゾ物質（圧電物質）と反重力、テレポート

ピエゾ物質は、圧力が加わると電気が発生する。ピエゾ物質に引き延ばす力

を負荷すると負の誘電率が発生し、そのプラス極に普通の磁石の N 極を、マイナス極に S 極を貼り付けると、負の透磁率が実現する。この空間内で、**ピエゾ物質から発するビーフェルト・ブラウン効果を使って、反重力浮揚、水平方向へのテレポートを実現できる。**

前述の水晶は圧電体でもあるが故、適切な磁場等（生体磁場？）が作用すれば、特に左手系水晶の内部は負のエネルギーが充満する空間となり、宇宙を貫く S 極エーテル繊維と繋がって未来が見える！？

(10) オオマサガス (OHMASA - GAS)

<http://www.ohmasa-gas.org/>

オオマサガスとは、“Oxygen Hydrogen Mixing Atomic Symmetrized Aeration Gas”（＝酸・水素ガス）のことで、発明者の大政龍普氏（日本テクノ株式会社）にも因む。

具体的には、水を特殊な振動攪拌で電気分解を行うことにより、振動流動下での電解時にナノ・マイクロバブル（酸素と水素のガスが微細な泡になったもの）が生成し、これが破裂することで強力なエネルギーが発生し、安全な酸素と水素の結合体のガス（OHMASA - GAS）が得られる。（一般的には、酸水素ガスは、水素と酸素の混合気体である。）一部の人たちの間では、これこそがフリーエネルギーだと主張されているが、以下が特徴とされる。

①耐漏洩性

耐漏洩性に優れ、普通のステンレス製ボンベに 2 年以上貯蔵してもほとんど圧力の変化が無く、水素脆性（水素による劣化）は全く発生しない。

②超高温にならない

エンジンを作動させても超高温にならず、アルミ合金でも長時間の作動に耐え得る。

③クリーンな排気ガス

燃焼後の排気ガスは水蒸気のため環境汚染が無く、従来の化石燃料と同じ温度で燃焼するので、内燃機関改造の必要が無い。

④特徴的な液化温度、燃焼温度

-178℃で液化するので、安定した酸水素液としての流通が可能である。

燃焼温度は 600℃～700℃と比較的低温だが、対象物によっては 3000℃の燃焼エネルギーを発生する。

また、液化した酸水素を常温に戻して気体になると、元の酸水素ガスとなって再び燃焼する。

⑤純水素より起電力が大きい

水素用の専用燃料電池を使用して、同じ条件下で純水素と OHMASA - GAS の起電力を比較すると、OHMASA - GAS の方が 5～7%大きい。

また、純水素に OHMASA - GAS を混合することにより、従来のインフラのままでも、安全な水素ガス燃焼が可能である。

日本テクノ株式会社のホームページではこのように述べられているが、“入力するエネルギーよりも出力されるエネルギーの方が大きいフリーエネルギーである”などとはどこにも述べられていない。通常、電気分解はエネルギーをかなり消費するので、それを利用したものならば、“入力するエネルギーよりも出力されるエネルギーの方が大きい”ことはあり得ない。実際、環境省・地球温暖化対策技術開発事業の検証実験で確認されたのは、燃焼させた場合に取り出せるエネルギーは電気分解に必要としたエネルギーの約 50%に留まり、エネルギー密度も都市ガスの 1/5 程度でされ優位性が無い結果となった。(Wikipedia) 電気分解に要したエネルギー、負荷した振動エネルギー、燃焼させた場合の厳密な熱の出入りを調べれば、当然の結果と言える。

このガスのメリットは、空気中の酸素と爆発的に化合する危険な水素を使用する燃料電池よりも安全で、排気ガスは水蒸気であるため環境汚染が無い、という点にある。また、プロパンガスとの混合により、プロパンガス単独使用時よりもガス使用量を節約できる面もある。(プロパンガスとの燃焼に於いても“入力するエネルギーよりも出力されるエネルギーの方が大きい”ことはあり得ないが、そのような主張をしている人もいる。それは、プロパンガスの有する内部エネルギー等が考慮されていないと思われる。)

なお、通常の電気分解で得られるガスと違い、水クラスターが多く含まれているために爆発しないことが、首都大学東京大学院理工学研究科により判明している。(Wikipedia)

では、何故ここでオオマサガスを紹介したのかというと、その製法によって **常温核融合が可能らしい**からである。例えば、特開 2009-28667 に依れば、振動板を 100Hz 以上の周波数 (135Hz) で振動させる攪拌機によって超純水を常温で

200 時間連続攪拌すると、マグネシウム、アルミニウム、亜鉛などの元素が増える。(分析値は、平成 18 年 12 月 20 に当時東京工業大学原子炉工学研究所所長だった有富正憲氏が、東京工業大学の ICP 質量分析計を使用して測定した結果。)

特開2009-28667の実験結果(ppb)

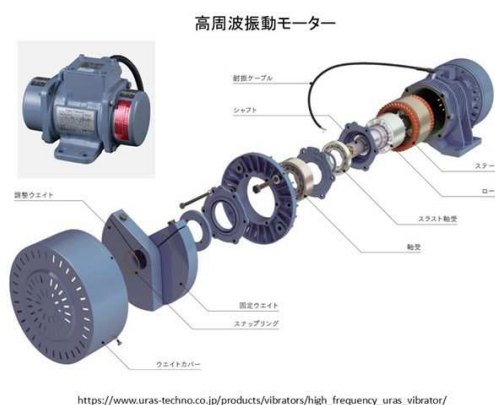
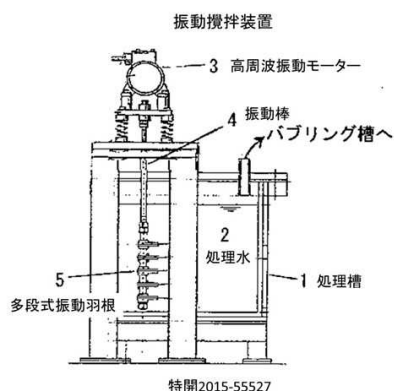
		Mg	Al	Se	Cu	Zn	Na	Ca	K
1回目	振動攪拌前	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11	0.12	0.00
	振動攪拌後	583.47	6.30	0.36	6.74	133.44	3.53	12.17	1.84
2回目	振動攪拌前	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.14	0.00	0.02
	振動攪拌後	621.29	7.48	0.97	7.33	147.35	4.36	8.85	1.94

また、特開 2015-55527 に依れば、160Hz にてセシウム 137、セシウム 134 を含む放射能汚染水を電気分解すると無害化され、カルシウム水を電気分解すると鉄、銅、コバルト、ニッケル等が生成する、という現象が発生する。(以上の詳細な実験条件については、各特許を参照のこと。)

特開2015-55527の実験結果

	処理前	30日後	分析機関	測定機器
Cs 137	1955 Bq	520 Bq	市民放射能測定所	ゲルマニウム半導体検出
Cs 134	1162 Bq	308 Bq	同上	同上
Ba	0.52 mg/L	未検出	埼玉県産業技術総合センター	ICP質量分析計

	処理前	20日後	分析機関	測定機器
Ca	2800 mg/L	1800 mg/L	埼玉県産業技術総合センター	ICP質量分析計
Fe	< 10 µg/L	7700 µg/L	同上	同上
Cu	3 µg/L	370 µg/L	同上	同上
Co	1 µg/L	270 µg/L	同上	同上
Ni	12 µg/L	14000 µg/L	同上	同上



ICP 分析に於いてはベースラインやバックグラウンド補正が適切であることが重要だが、これらの実験結果はその点を考慮しても処理前後に於いて明らかに有意な差と言える。しかし、使用した電極や槽などの材質から溶出している

可能性もあるので、第三者による詳細な再現・確認実験が必要である。仮に、これらが事実だとしたら、驚くべき現象である。この現象についても、スミルノフ物理学で説明が成されている。

・オオマサガス製法の常温核融合に対するスミルノフ物理学での説明

使用されている高周波振動モーターのモーター部はヘリックス型のソレノイド・コイルだが、ここに電流を流した場合、外側の空間は正の透磁率、内側の空間は負の透磁率の空間となる。つまり、振動攪拌によって負の透磁率である負の世界が出現する。それにより、エーテル繊維がとぐろを巻いてS極、N極磁気単極子が形成される。

原子核内の陽子はN-S-Nの、中性子はS-N-Sの磁気単極子結合体で、正の透磁率の場合（我々が認識している三次元の場合）に於いて互いに磁氣的に引き合うが、そこに左巻きの渦のS極磁気単極子どうしがその接触面で互いに相手の自転速度を減じるので、宇宙全体を通じて繋がっている負の性質のS極系エーテル繊維を引き込む。そのため、陽子や中性子中のS極磁気単極子どうしが強力に引き合って原子核を形成し、原子核内は負の誘電率の世界となる。

ここに、振動攪拌によって発生した負の世界のS極磁気単極子が作用し、負の透磁率の水が触媒となって、より多くの陽子や中性子が結合して大きな原子核が形成される。すなわち、常温核融合である。

この際に供給される陽子や中性子は、真空エーテル由来である。原子核内は負の誘電率で極低温ではあるが、メビウスの帯構造故に、透磁率的には全面的に負とはならず、正の透磁率と負の透磁率とが混合している。その結果、N-S-Nの磁気単極子結合体として陽子が、S-N-Sの磁気単極子の結合体として中性子が真空エーテルから形成され、供給される。

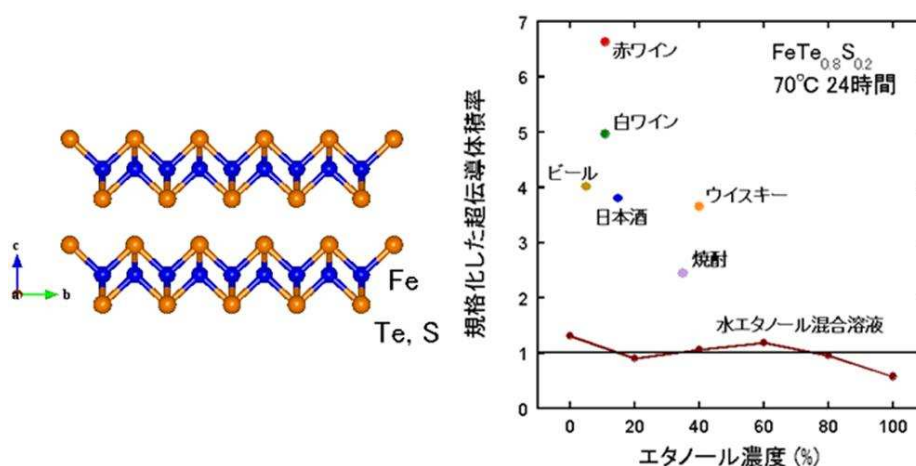
よって、“電解時にナノ・マイクロバブルが生成して破裂する際に発する強力なエネルギー”が原因ではない。ちなみに、バブルが破裂する際に発生するエネルギーは衝撃波や超音波であり、決して“フリーエネルギー”やそれに関わる類のものではない。今後は振動の周波数を変えたり、振動を伝える振動棒の材質や電極材質を負の透磁率の金、銀、銅などに変えたりして、効率よく常温核融合できる条件を見いだすべきだろう。

(11) 真面目な実験結果の考察：アルコール超伝導

アルコール超伝導について、独立行政法人・物質・材料研究機構が発表している研究成果がある。

・磁性体と超伝導体の間の性質である $\text{FeTe}_{1-x}\text{S}_x$ を、数種類の酒に浸漬した結果、超伝導効果が速やかに発現した。

(<http://www.jst.go.jp/pr/announce/20100727-3/index.html>)



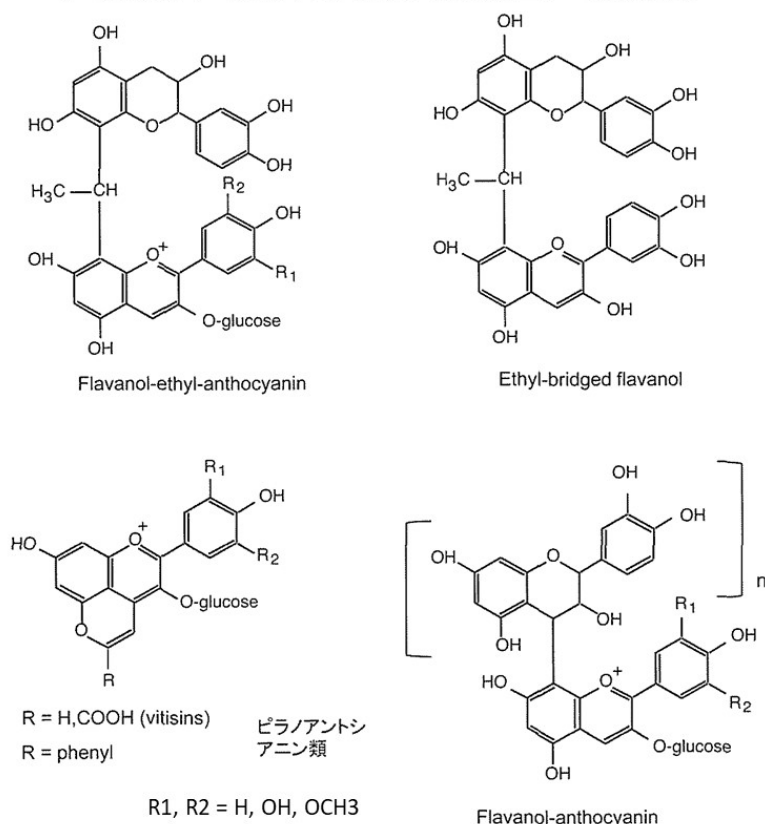
<http://www.jst.go.jp/pr/announce/20100727-3/index.html>

ワイン、ビールでの効果が著しく、エタノール濃度は超伝導効果に無関係である。となると、酒に残っている酵素＝酵母が原因である可能性が高い。酵母が負のエネルギーを取り入れているのだろう。(日本酒の多くは火入れされ、酵母の作用を止めている。ここで使用したビールは、熱処理していない生ビールであると推測される。)

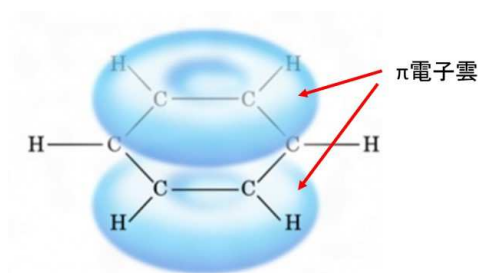
また、この中で、**赤ワインの効果が最も大きい**。赤ワインにはポリフェノールの一種、タンニンが多く含まれる。タンニンは鉄と結合しやすいので、結晶中からタンニンと反応した鉄が抜け、その欠損結晶構造が超伝導を誘発した、とすれば、蒸留して酵母残存率が低いウイスキーでも超伝導発現率が高いのは、樽での熟成により、樽からポリフェノールが溶出しているため、と辻褄が合う。しかし、ポリフェノールの構造に着目すれば、次のようにも考えられる。

ポリフェノール類は芳香環（ベンゼン環）が連なったほぼ平面構造で、構造中には不対電子を有する $-\text{OH}$ 基や酸素原子を多く含み、平面の上下には π 電子が共鳴し、 π 電子雲を形成している。つまり、構造全体が電子の雲に覆われていると言っても良い。

ワイン醸造中・熟成中に生成するポリフェノール類の例



<https://agriknowledge.affrc.go.jp/api-agrknldg/media/pdf/show/id/2010831899>



<http://jimmy5555.blog.fc2.com/blog-date-20180213.html>

超伝導は、負の誘電率・透磁率の空間がはみ出すことに因る。そして、電子は S 極磁気単極子の周りに N 極系エーテル繊維（電荷）が巻き付き、自転による単極誘導で発生する電荷に囲まれた S 極単極磁石であり、負の性質である。

よって、ポリフェノール類の存在によって負の誘電率・透磁率の空間が飛躍的に増大した結果、超伝導効果が促進されたと考えられる。酵母の負のエネルギー効果も考慮すれば、こちらの方がより妥当な推論と言える。今後の検証実験として、酵母及びポリフェノール類の種類や量を変化させるべきだろう。

神々アヌンナキの故郷ニビルではワインが万能薬だったし、ポリフェノールを豊富に含むチョコレートはギリシャ語で“テオブロマ（神様の食べ物）”と言われているのも、偶然ではないだろう。ちなみに、ポリフェノールは和食では緑茶や根菜類、黒米、大豆製品などに多く含まれる。（そこに、海藻類による S 極磁気単極子を強力に集める効果。）

(12) まとめ

- ・物質宇宙を生み出した大元の存在＝起源意識＝創造主は、無限的な広がりを持つ巨大な光のエネルギーであり、そこから黄金分割により星や物質、生命体が誕生した。

- ・宇宙は秩序を形成する、エントロピー減少の収縮系であるが故に、生命体が進化する。

- ・宇宙はメビウスの帯のような複素空間で、エーテル繊維（のエネルギー）で満たされている。

- ・エーテル繊維は負の性質を有する S 極磁気系と、正の性質を有する N 極電気系で構成され、それぞれ S 極磁気単極子、N 極磁気単極子を形成し、エーテル繊維は宇宙に網の目のように存在する。

- ・S 極磁気単極子、N 極磁気単極子が物質の根源である。

- ・全宇宙は S 極系エーテル繊維が対数螺旋構造を成して繋がっており、万有引力の基となっている。そして、すべての星の中核には S 極磁気単極子が存在し、宇宙を貫く S 極系エーテル繊維に繋がっており、対数螺旋を成す S 極系エーテル繊維がベースとなって物質が生成し、生命体が発生した。この S 極系エーテル繊維のエーテルエネルギーこそ、龍のエネルギーである。これを暗示しているのが、籠神社と眞名井神社である。

- ・生命体は起源意識というエネルギー体では経験できない“感覚”というものを通じて感じ、様々なことを認識・経験し、自らが何なのかを知り、進化するために創られた創造物であり、すなわち、起源意識の分身であり、物質宇宙はその生命体の活動の場（器）として創造された。そして、生命体は死によって物質としての肉体から生命エネルギーの本質である S 極磁気単極子が抜け出し、起源意識のもとに戻って一体化し、生前の経験や記憶が起源意識にフィードバ

ックされ、起源意識が進化する。

・螺旋的に上昇・進化することが宇宙の摂理であり、これに反する存在は淘汰される。つまり、自分勝手なエゴを持った人間は、一時的に繁栄しようとも、宇宙の物理法則に従って、必ず破壊される運命にある。

・原子核の重要な性質を担っているのはS極磁気単極子であり、S極磁気単極子により、放射性元素は無害化でき、最終究極兵器にもなる。

・太陽や地球などの星の極は磁気単極子が元となっており、太陽表面は熱くなく、地球内部にはシャンバラがある。

・磁場（磁気）、メビウスの帯構造及び四面体構造が重要である。

・常温核融合、常温超伝導、反重力、テレポーテーション、フリーエネルギーなど、スミルノフ物理学から導かれる。

・神道や祈りなど、宇宙の仕組みに適ったものである。

現在、スミルノフ物理学を唱える佐野博士は、政治・社会問題まで含めて毒舌的に批判していることから、様々な方面から非難されている。佐野博士の唱える理論には、部分的には誤っている部分もあるかもしれない。しかし、スミルノフ物理学はれっきとした物理理論である。ならば、常識を振りかざしたり、感情的な批判ではなく、方程式、論理展開、観測結果、実験結果を基に、反論すべきである。

かつて、政府主導で秘密裏に超能力研究が行われていた時期があった。ならば、未来を切り開く可能性のあるこの物理理論は、某忍術宗家の弟子とも言われるプーチン氏が大統領である間にロシアと秘密裏にでも協力し、国家プロジェクトとして本格的に検証を開始しても良いのでは？（忍術では師匠－弟子の関係は絶対とされるので、プーチン氏は真の親日家であるとも。ちなみに、本編が公開された2018年は「日本におけるロシア年」及び「ロシアにおける日本年」が相互に開催される年でもある）。

科学とは、既成概念に囚われることなく、新たな発見・創造をすることに他ならない。